網走水試ミニレター

No.58　2017. 1. 4

あけましておめでとうございます。本年も職員ともども、どうぞよろしくお願いいたします。

▼網走水産試験場は、昭和 17 年 10 月に網走水産指導所として網走市南 4 条東 4 丁目に仮庁舎で開設されてから、今年で 75 年目を迎えます。前年の 12 月には太平洋戦争が始まっていますが、現在ある中央・函館・釧路・稚内水産試験場などと比べると遅いスタートでした。本場（現:中央水試）は明治 34 年の設置ですから約 40 年後のことになります。その後、昭和 23 年には北 11 条東 1 丁目に木造 2 階建ての新庁舎が建てられます。昭和 25 年には北海道立水産試験場網走支場となり、建物も増築されました。同年、紋別水産指導所は紋別分場となっています。東京オリンピックのあった昭和 39 年には、それまで 1 本場（余市）4 支場（函館、釧路、網走、稚内）だった体制を 5 水試体制とし、紋別分場は本場から網走水試の分場となりました。昭和 40 年には常呂町に網走水試サロマ分場が新築され、翌年には現在の庁舎が鱒浦 31 に鉄筋コンクリート 2 階建て、敷地 1,038 坪、建物延べ 199 坪、総工費 3,506 万円で建てられています。

▼網走水試設立当時やそれ以前は天然に発生するホタテガイを漁獲していたので、年による漁獲量の変動が激しかったようです。戦後、天然での発生が少なくなり漁獲量は減少していきます。その後、ホタテガイの採苗試験が行われ、採苗した稚貝を用いてサロマ湖では垂下養殖が、昭和 40 年ころから、放流ホタテガイの漁獲は昭和 50 年くらいから増加し始めます。放流での漁獲が増加し始めたのは稚貝を越冬して大きく育て、翌春に放流するようになってからのようです。そのころ加工利用部では、網走市内の加工業者と冷凍すり身の実用化に向けた研究を行い、様々な技術改良により生産量を飛躍的に高めました。市内には(一社)全国すり身協会も設立されます。サケについても戦後再び稚魚の放流数が増加し、餌を与え大きくして放流するようになった昭和 50 年くらいから来遊数が増加し始めます。現在ではホタテ、サケともに道内の主要な生産基地になっています。

▼ホタテガイやサケなどは、長年の研究や生産者の努力によって漁獲量が大幅に増加しましたが、近年は頭打ちからやや減少傾向が見られます。気象庁によりますと昨年の世界及び日本の平均気温は、ともに統計を開始して以来それぞれ最も高くなったとのことです。温暖化や台風などによる影響が懸念されるところです。生産性の高い管内の生産量をいかに維持するかは、やはり生産の器となるオホーツク海や湖沼での環境研究が欠かせないものと感じています。モニタリングなどで環境(相手)の変動をよく知り、環境につかず離れずに利用するバランスが大事だと考えます。最近は環境を測定する各種センサーや衛星、GIS、ICT、IoT などの技術開発や利用が急速に進められています。75 年目を迎え、新しい技術も取り入れ、さらに調査研究の進展を図っていきたいと考えています。（網走水試 上田）